第１１回全国学校飼育動物研究大会開催報告

全国学校飼育動物研究会 会長　宮下　英雄

日時：平成２１年９月６日（日）午前１０時３０分～午後５時
会場：かながわ県民センター
テーマ：飼育担当あつまれ～　継続飼育とその役割
基調講演：中川美穂子　「負担の少ない、楽しい継続飼育と教育的効果」
参加者：234 名（教員・大学・教育委員会など教育関係者、獣医師会員、保護者、マスコミ　他）
開会・来賓挨拶
文部科学省初等中等教育局教育課程課　神奈川県教育委員会　社団法人日本獣医師会
紹介　川崎市教育委員会　社団法人神奈川県獣医師会　社団法人横浜市獣医師会
社団法人川崎市獣医師会　一般社団法人日本小動物獣医師会

来賓の教育関係者は、新学習指導要領に継続する動物飼育体験の必要性が明記されたことに言及して、日頃の獣医師の支援に感謝を述べられた。また獣医師会は、支援体制を案内された。

参加者は、東京や神奈川、埼玉からの参加者が目立ったが、北海道から沖縄までの、全国 28 都道府県から 234 名であった。内訳は、文部科学省関係者をはじめ、教師、教育大学生や教育委員会など教育関係者が 139 名、獣医師会、開業獣医師、獣医学生など獣医師関係者 69 名、マスコミが 14 名、保護者や愛護関係を含む一般が 12 名であった。なお教育委員会の方は、神奈川県、川崎市、横浜市、東京都をはじめ、千葉県、群馬県、京都市やさいたま市などから参加された。

§講演：本会事務局長、日本獣医師会担当委員、そして全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰である中川美穂子氏が、教員が「飼育は良いけれど、大変だから・・」と敬遠するため、「負担の少ない、楽しい継続飼育とその成果」と題して、子どもの発達に基づいた飼育活動の教育的な意義のデータを示しながら、学習指導要領の総則にあった「意義ある動物飼育を活用した教育活動の方法」を示した。また実際の運用面について、課題と解決方法を示した。特に、動物飼育活動は、子どもの頭と心、そして体を使った活動であり、知的・心的成長に欠かせないものとして、「命には休みがない」と親が子に示すために、保護者の教育への参加を求める方法を実例から紹介した。

最後に、４年生時期に、教育的意図を明確にして獣医師の支援のもと、教師の指導を受けて丁寧な飼育活動を体験した子たちは、その活動終了一年後にあっても、他者への温かさ、向社会的態度（おもいやり）において、飼育活動をしない、あるいは教師の指導的関与がないまま不適切な飼育をした４年生に比べて、有意の差をもって良い影響を示し、学校適応についても、他の二群より良い影響を残していたと紹介した（第 59 回日本理科教育学会にて中島と中川が発表）。また家庭での飼育の有無に関わらず、学校での指導によって子どもに良い影響を示すとのデータも紹介した。

宮下英雄会長

§分科会：午後からは５つの分科会に別れ、それぞれ実践の発表を踏まえて情報交換を行った。

① 飼育の基礎とふれあい体験

事務局長の中川美穂子が、飼育活動は子どもたちが動物をかわいいとの「愛着」を感じたときから教育活動になるという考えから、飼育の作業を簡単に終え、ふれあいの時間を確保するための方法と学年の教育として飼育活動を位置づけた飼育導入授業の方法を示し、参加者に動物ふれあい授業の実習を行った。助言者の村山哲哉教科調査官は、理科の教育活動としても飼育活動は意味がある。飼育活動の教育的目的を確認し、最後は言葉（作文）の教育に落とし込むように指導すべきと話した。また実際に動物を抱くふれあい体験は教員にとって有効な体験となったと述べた。

村山哲哉教科調査官

保護者役の獣医師に、ふれあいの介助法の実演

参加者、ふれあい体験中

②幼児のための飼育

川崎市の宮前幼稚園と西東京市の谷戸幼稚園が、環境教育、愛情教育の立場から保護者、獣医師の支援を得て行っている動物飼育体験を幼児に保証している実践を紹介した。助言者の矢部獣医師は２園に敬意を表すると述べ、篠原孝子教科調査官は、「ソニー教育財団の保護者･園の意識調査では、動物飼育体験に期待する親や園が激減している状況があり危惧を感じるが、本日の２園の丁寧な飼育活用教育と、愛情に輝く子どもたちの様子に希望を感じる」と発表者を励ました。

篠原孝子教科調査官

② 生活科での飼育活動

横浜市の市立立野小学校と戸部小学校が、生活科でのモルモット飼育の実践を発表した。両校とも、子どもたちは様々な発見と工夫をしながら世話を継続したことと、この一年間の飼育活動が子どもにもたらした有意義な影響の大きさ、そして「終わり方の課題」を示した。

助言者の田村教科調査官は、「学校飼育は価値ある学習活動である、たとえ学級の飼育でも、学校の責任だと考える。飼育環境が整ってない地域にはこれからも働きかけたいが、学校の課題に対しては、獣医師などの専門家とうまく連携しながら、学校の教育活動をみんなで支え、継続的な実践が続けられるようしていきたいと考える。」と話した。また獣医師である桑原前群馬県教育委員長は、「飼育の始めから終わりまでしっかりとした計画を持ち、特に仕上げである『終わり方』を子どもの心理と動物愛護に配慮した『学校の教育計画』に沿って行う必要がある」と助言した。

田村学教科調査官

④ 動物飼育活動と校内体制

川崎市立野川小学校は、子どもへの良い影響をみて、休日の世話を教師全体で行い「飼育は楽しい」との雰囲気作りをしてきたところ、ウサギ１匹の飼育委員会に 30 名が集まった。学校は、獣医師会の支援で、今年度ウサギとチャボを新たに導入して飼育活動を充実した、と報告した。岐阜県獣医師会は、毎年「学校飼育動物シンポジウム」を開催してきたこと、昨年からは９校でミニウサギ、モルモットのケージ飼育に取り組み、その報告会を開催したこと、本年度からは「ぎふ学校

飼育動物の会」を発足させ交流を深めていることなどを発表した。助言者の吉本恒幸全国小学校道徳教育研究会長は、「管理職の意識の改革、獣医師会からの働きかけ、そして教師の理解を誘うことが必要だが、管理職のリーダーシップにより飼育活動の校内体制を整えれば、「よみがえり」を信じがちな子どもたちに、本当の「命の教育」など、様々な体験教育を与えることができる」と話した。また新潟大学で生活科の授業を受け持つ宮川獣医師が、「野川小学校の事例は、校内体制化する良い方法だ。全国の獣医師会も学校を支援する体制を作りつつある。校内体制として飼育活動を教育活動にするために、参加された先生方が一歩を踏み出すことを期待したい。」と助言した。

⑤ 子ども支援と動物飼育

NPO 法人葛飾幼児グループが就学前の気になる子どもたちの通所施設に犬をつれてふれあい体験を行う実践を、子どもの様子や保護者の様子などから報告し、お互いに幸せな時間を持て、子どもとの付き合いを通して犬も社会化し成長したと報告した。奈良帝塚山大学の非常勤講師の三本・西の京動物病院長が、3 校の特別支援学級でモルモットを飼育した実践について、同じく教師、保護者の感想と、子どもたちの変化について、障害別に報告した。最後に知的障害学級担任や特別支援学級設置校の管理職を勤めた阪本伸一小平市教育長は「障害のある子どもたちの発達、成長と社会参加への支援で飼育活動は重要と考える。そのためよりいっそう管理職の考え方と、現場教師を支える獣医師の位置づけが大切だろう。これは社会全体で考えなければ進まないが、今後議論を重ねながら、参加された全員がいろいろな考えを持ち帰り、そしてまた暖めた考えを持ち寄ることをしなければならないだろう。」と助言した。

§全体会

各分科会での内容を、各分科会司会の高橋定仁氏（飼育の基礎とふれあい教室）、塚田俊雄世田谷区立千歳台小学校校長（幼児のための動物飼育）、関田義博東京学芸大学附属小金井小学校副校長（生活科の動物飼育）、鳩貝太郎国立教育政策研究所総括研究官（動物飼育と校内体制）の各氏と、山尾動物病院長（子ども支援と飼育動物）が報告した。

§まとめ

最後に本会顧問の白梅学園大学大学院教授の無藤隆氏が、大会をまとめ閉会した。

無藤顧問のまとめ

動物飼育活動は、実際に見る触るなどを継続することで、動物を通して生物を理解し、やがて人間の「命の教育」に移行し道徳教育の一環となるなど、環境教育、自然教育、命の教育に位置づけられると考えられる。

例えば、世話をしてきた動物が死んだとき、死体に触り、死んだ理由を知りたがり、獣医師から科学的な説明を受けて、死の理由を知り、認識できる。また悲しみの中で「生き返らない」と理解する。このような体験ができる動物飼育体験は、世話などの身体的な体験（体）、知識を得る、認識する体験（知）、愛情を抱き、悲しみを知る体験（情）に関わることになるが、指導者は、子どもが、今飼っている動物そのものと出会うという体験の中で、調べたり、動物と感情をやりとりしたり、愛情を感じ愛着を作っていくなどの体験に結んでいくように、求められる。

無藤 隆 顧問

また、動物飼育は、今多くの学校で見られるように、「好きな人に任せる」のではなく、日本のどこの子どもたちも、その成長の中で、どこかで体験すべきである。そのためには、カリキュラムの一環として、学校が明確にしていくべきだろう。なお、保護者の理解と関与には説明が欠かせないなど、学校の体制づくりを推進することが必要である。（以上）